

# 新女性

復刻版

全16巻+別冊1(DVD-ROM付)

1950(昭和25)年10月

▼  
1956(昭和31)年5月

戦後女性解放運動の先駆!

敗戦後、「働く婦人」などいくつもの女性雑誌が誕生するなか啓発的な立場からでなく編集部と読者との緊密な提携によって運動の歴史に新たな一ページが刻まれた――現実を直視した名もなき女性たちによる闘争と活動の記録!

A5判・上製・総9、496頁  
掲載回数 370、000円+税  
記念配本 (2010年6月~2011年12月)  
解説 伊藤康子

雑誌「新女性」は、一九五〇年一〇月、新女性社より創刊され、一九五六年五月、六四号をもつてその幕を下ろす。本誌は、日本プロレタリア文化連盟によつて戦前より発刊された「働く婦人」の流れを汲むといわれるが、「新女性」には「働く婦人」の啓發的な志向よりも、むしろ一般大衆女性とともに歩もうとする姿勢が強い。それは、めまぐるしく変化する時代状況の中で、もがきながらも社会と対話する人々の記録としてあらわれている。

本誌が創刊されたのは朝鮮戦争の勃発、GHQ占領体制の終結が政治的

日程に上るなど、日本の独立のあり方が問われたまさにその年のことである。

創刊当初から平和擁護や講和、松川事件や三鷹事件に関する記事を取り上げるなど、当時の社会情勢を色濃く反映した誌面を生み出している。

しかし、これらの社会情勢に関わる記事にも増して、本誌の大きな特徴として挙げられるのは、性差別や人権弾圧事件、生活に根ざす問題、あるいは

職場問題など、女性たちの生の姿を記録していることである。これらの問題は、編集部によつて「本誌の誇り」と称された「眞実の記」という読者投稿欄を中心につつしとられた。「眞実の記」には、「農村の妻として」「わたしは朝鮮人」「雑布横丁にあがる歌声」「三百年の絆をたちさつて」ストにたつた三越の乙女たち」「原爆の長崎に生きて」「基地奈良の姿」といった、貧困にあえぎ、戦争による傷あとを抱える人々の心情が綴られている。また座談会、対談、ルポルタージュ、現地訪問記などによつても、苦難や差別とたたかう人々の実生活が浮き彫りにされている。

他方で、新作映画の紹介、料理の献立や洋裁の記事といつた、人々の暮らしに關わる娛樂的な誌面づくりがなされた。松田解子、佐多稻子、徳水直、野間宏、岩崎祐など多彩な執筆陣が顔をそろえる教養・文芸記事、山田五十鈴、乙羽信子ら映画女優のグラビアやインタビュー、朝倉撰による表紙画などは、敗戦後の新しい時代のなかで、自らを解放とうとする女性たちの意思を表現している。また、本誌において、全国各地に存在したサークル誌との交流もみられる。

戦後女性史のみならず、近代史、社会運動史、民衆史を補完する上で、有機的な作用をもたらす資料として復刻する次第である。

不二出版



## 特集 新しい中国

表紙 韶金 墓  
字 高遠 錦吉

六月のことば「声をひょいに」

婦国者座談会 中国みたまま聞いたまま

十三年の中国生活から 映画監督 木村莊十二(16)

中国の美術工作者と人民 教師 高松甚二郎(31)

母への手紙 工場事務 山原けさ(34)

【女性時評】あの道ひとり通 北鬼 助(38)

【女性時評】石けん・ミシン やさしい経済

【翻書案内】マヨフスキイ

【ゆき子の教室】(第12回) 映画の見方 レーニン帽と人皮服の女性

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

祖國の土をふんで 教師 長谷川靜子(35)

あれから六年 学生 樋口 薫(36)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

【女性時評】おひさまさん 沢井 静美(43)

【女性時評】おひさまさん 佐多 稲子(71)

【女性時評】おひさまさん 国分 一太郎(73)

【女性時評】おひさまさん 新藤 兼人(43)

【女性時評】おひさまさん 蒼木 あや子(44)

【女性時評】おひさまさん 北鬼 助(38)

【女性時評】おひさまさん 和田 一夫(40)

## 新しい民主的女性像を追求

犬丸義一

●いぬまる・ぎいち 元長崎総合科学大学教授

私は八十を越えて、仕事のまとめを考えざるをえなくなつてい

る。日本近現代史家として、女性史・女性状態史と女性運動史の統一を重視した。そこで、方法論・女性史・女性論争にも参加した。

この論争をへて、現代女性運動の民主統一戦線的性格が確認され、月刊女性誌『女性のひろば』も刊行され、今日まで継続されている。

『女性のひろば』には、前史があり、「働く婦人」戦前・戦後版、『新女性』がそれであり、女性史の重要な資料である。

私は『新女性』の前史的な存在である『働く婦人』戦前版の復刻版の刊行に努力し、山本千恵さんとともにその解題を執筆した。

同誌の戦後版は原本もなかなか揃わぬ、やっと揃えたところ、ほ

かの戦後雑誌の復刻の一環として、刊行されたことを知った。

『新女性』の編集者だった児島せの子さんの伝記を『婦人通信』に連載した小田部利子さんに、私の蒐集した限りの同誌を提供して貰ったところ、橋本宏子さんが、編集部から入手した初期の合本があると、『通信』に投書した。これは創刊号以来初期の分の合本二冊で貴重なものだった。なお欠本が若干あったが、不二出版編集部が埋めて、復刻にこぎつけることができた。

私は宿願を果せて大喜びである。現代日本女性史の重要な資料として、利用・活用を期待する。

## 女性たちの輝かしきトライアル・アンド・エラー

坪井秀人

●つぼい・ひでひと 名古屋大学大学院文学研究科教授

一九五〇～六〇年代の「運動文化」を再定位する近年の批評と研究の高まりのなかで見過ごされてきたのが、女性たちの闘争に対する評価だった。組合もサークルも、党も、闘争に関わる表現において、男性中心主義を決して免れることができなかつたからだ。

そのようななかで雑誌『新女性』は闘う女性たちの声をリアルに今日に伝えるさわめて貴重なメディアだ。当然のこと、闘争には常に錯誤がつきまとつ。例えば一九五三年の中国特集やソ連特集などを見ると、共産主義体制を楽園と信じて疑わぬ手放しの讃美や画一化された反米の強調には、一種懐かしい時代を感じてしまう。

だが、沖縄や基地体制の矛盾、近江絹糸の闘争を女性主体の立

## 女性の闘いや運動の実情を知る貴重な情報源

橋本宏子

●はしもと・ひろこ 元熊本学園大学教授・女性福祉研究家

弁護士・医師・大学教員・会社役員など専門職女性がいるのはあたりまえの現在、六〇～七〇年前まではほとんどの女性が結婚など家族に従属した生き方に拘束されていたことを想像できるだろうか。

かつて女性の専門学校はあったが大学は皆無、女性の入学を認める大学に稀に在学した人もいたが、進路は限られていた。

戦後得た男女平等の権利は、どれほど女性を勇気づけたことか。戦後青春を迎えて「さあ人間らしく生きよう」と期待したものの、旧来の考え方で閉まれ、世間は無理解で男女平等の壁は厚かった。創刊された数多くの女性雑誌のなかでも、一九五〇年、『新女性』の発刊は「女性が働くことを当たり前に扱い、女性の職場での闘いや運動を紹介し、「共稼ぎ」を肯定的にとらえて編集されていた。

発刊当時は二歳、学生だったがたくさんのことを見た。

## 歴史にうずもれた女性たちの格闘

藤目ゆき

●ふじめ・ゆき 大阪大学人間科学研究科准教授

『新女性』の復刻版が刊行されると知り、女性史研究者の一人として心が躍る思いだ。この女性雑誌は朝鮮戦争勃発もない一九五〇年一〇月に創刊され、一九五六まで刊行された。日本の女性運動は敗戦後、GHQの女性解放政策にも後押しが受け、新憲法のもとに勢いよく再出発したが、朝鮮戦争の勃発と冷戦の激化によって女性運動もネガティブな影響を受けることとなつた。女性運動の左右対立が顕在化し、左派女性運動の間でも分裂が生じた。

そんな暗い谷間のような時代に、この雑誌は新しい生き方を求めていた当時の女性たちにとって心の拠りどころでもあったことだろう。誌面からさまざまに当時の女性大衆の暮らしや闘い、希望や

苦難といったものが伝わってくるが、とくに私が熱心に読んだのは、労働者や在日コリアン、政治弾圧犠牲者たちの経験を綴った「眞実の記」の連載だった。後の時代に忘れられていく、朝鮮戦争時代の厳しい現実と格闘した女性たちの姿が誌面から浮かび上がってくる。手に入りやすいとはいえないが、『新女性』を探してみる、その記事を手がかりに、当時を知る女性たちを訪ね歩いた。

五〇年代に一〇代、二〇代だった女性たちに出会い、半世紀前の経験や思いを聴かせていただけのは感激だった。復刻によつてこの雑誌が多くの人々の目にふれることになれば、戦後女性史の中で失われていた時代が新しい視線で見つめ直されることになるだろう。



推薦します





西川文子ほか||主宰(一九二三~一六年刊行)

**新真婦人****全六巻・付録一・別冊**

別冊||解説(岡野幸江)・総目次・索引

菊判・上製・総四、一二ページ

摘要価・本体二万円+税

男性中心社会を厳しく糾弾し、女性問題・女性解放を見据えた評論雑誌。大正デモクラシーの息吹を伝える多彩な執筆陣を擁す。

ピアトリス社||刊(一九一六~一七年刊行)

**ピアトリス****全一巻**

解説(若田ななつ)・総目次・索引付き

菊判・上製・総六五〇ページ

摘要価・本体八、〇〇〇円+税

『女子文壇』『青鞆』に連なる、女性に開放された文芸雑誌。平塚

らいてう・岡本かの子・吉屋信子などが執筆。

改造社||刊(一九二三年~一四年)

**女性改造 戦前編****全二一巻・別冊**

別冊||解説(尾形明子・鈴木裕子)・総目次・索引

A5判・上製・総七、一二四ページ

摘要価・本体四〇、〇〇〇円+税

社会主義色の濃い総合雑誌として成功していた『改造』の姉妹誌として刊行され、文学・評論・科学分野での豪華な執筆陣に加え、

一九二〇年代のフェミニズムの旗手である女性たちが多数執筆した女性解放雑誌。

奥むめお||主宰(一九二三年~四年刊行)

**婦人運動****全二〇巻・別冊**

別冊||解説(鈴木裕子)・総目次・索引

A5判・B5判・上製・総九、八六〇ページ

摘要価・本体三〇万円+税

生活者であり労働者である女性の立場に立ち、「婦人消費組合協会」「婦人セツルメント」「働く婦人の家」を設立してきた職業婦人社の機関誌。

全関西婦人連合会||刊(一九二四年~三七年刊行)

**婦人****全一四巻・別冊**

別冊||解説(藤田ゆき)・総目次・索引

B5判・上製・総九、五七二ページ

摘要価・本体四八万円+税

西日本で三〇〇万人の会員を擁した戦前期最大規模の女性団体

全関西婦人連合会の機関誌。女性差別的な法律の改正・廃娼運動・婦選運動などに積極的に取り組んだ。

社日指した婦選獲得同盟の機関誌。

婦選獲得同盟||刊(一九二七年刊行)

**婦人****全一〇巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一五万円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはつきりと意識した本誌

は、「女人芸術」後の数少ない女性表現のメディアであった。

神近市子||主宰(一九三四~三七年刊行)

**婦人文芸****全一九巻・別冊**

別冊||解説(松尾尊児・兒玉勝子)・総目次・索引

A4判・A5判・B5判・上製・総七、五七二ページ

摘要価・本体一九五、〇〇〇円+税

婦選運動の中核となって女性の参政権・公民権・結社権の獲得

を日指した婦選獲得同盟の機関誌。

婦選獲得同盟||刊(一九三四年~三七年刊行)

**婦選****全一四巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一九五、〇〇〇円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはつきりと意識した本誌

は、「女人芸術」後の数少ない女性表現のメディアであった。

神近市子||主宰(一九三四~三七年刊行)

**婦人文芸****全一〇巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一九五、〇〇〇円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはつきりと意識した本誌

は、「女人芸術」後の数少ない女性表現のメディアであった。

神近市子||主宰(一九三四~三七年刊行)

**婦人文芸****全一四巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一九五、〇〇〇円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはつきりと意識した本誌

は、「女人芸術」後の数少ない女性表現のメディアであった。

神近市子||主宰(一九三四~三七年刊行)

**婦人文芸****全一〇巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一九五、〇〇〇円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはつきりと意識した本誌

は、「女人芸術」後の数少ない女性表現のメディアであった。

神近市子||主宰(一九三四~三七年刊行)

**婦人文芸****全一四巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一九五、〇〇〇円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはつきりと意識した本誌

は、「女人芸術」後の数少ない女性表現のメディアであった。

神近市子||主宰(一九三四~三七年刊行)

**婦人文芸****全一〇巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一九五、〇〇〇円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはつきりと意識した本誌

は、「女人芸術」後の数少ない女性表現のメディアであった。

神近市子||主宰(一九三四~三七年刊行)

**婦人文芸****全一四巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一九五、〇〇〇円+税

文学雑誌であると同時にフェミニズムをはつきりと意識した本誌

は、「女人芸術」後の数少ない女性表現のメディアであった。

神近市子||主宰(一九三四~三七年刊行)

**婦人文芸****全一〇巻・別冊**

別冊||解説(黒澤里子)・総目次・索引

菊判・上製・総六、三六二ページ

摘要価・本体一九五

# 新女性

復刻版

復刻版概要

## 全一六巻・別冊一(DVD-ROM付)

一九五〇(昭和二五)年一〇月~一九五六(昭和三一)年五月

解題=伊藤康子(元中京女子大学短期大学部教授)

体裁=A5判/上製/総9、496頁

別冊=解題・総目次・索引

\*別冊のみ分売可(本体2,000円+税 ISBN978-4-8350-6551-9)

● 捩定価=本体3,700円+税

● 推薦=犬丸義一・坪井秀人・橋本宏子・藤目ゆき

第4回配本	第3回配本	第2回配本	第1回配本	配本 復刻版巻数	原本刊行年月
第16巻	第13巻	第9巻	第1巻	第1号~第4号	1950年10月~51年1月
第15巻	第12巻	第10巻	第2巻	第5号~第8号	1951年2月~5月
第60号~第64号	第56号~第59号	第44号~第47号	第3巻	第9号~第13号	1951年7月~12月
1956年1月~5月	1955年5月~8月	第14号~第18号	第4巻	第14号~第18号	1952年1月~5月
			別冊	解説・総目次・索引+DVD-ROM	
			第5巻	第19号~第21号	1952年7月~9月
			第6巻	第22号~第24号	1952年10月~12月
			第7巻	第25号~第27号	1953年1月~3月
			第8巻	第28号~第31号	1953年5月~8月
					2010年12月刊行 定価=本体9,400円+税 ISBN978-4-8350-6546-5
					2011年6月刊行 定価=本体9,200円+税 ISBN978-4-8350-6557-1

2011年度刊行分

2010年度刊行分



\*カタログ中のISBNは誤りです。正しくはこちらをご参照ください。

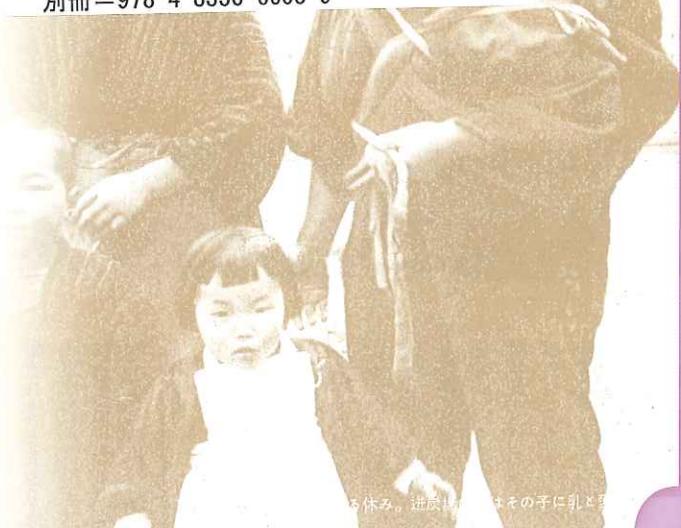
第1回配本=978-4-8350-6600-4

第2回配本=978-4-8350-6606-6

第3回配本=978-4-8350-6611-0

第4回配本=978-4-8350-6616-5

別冊=978-4-8350-6605-9



● 表示価格はすべて税別。

## 不出版

〒113-0023  
東京都文京区向丘1-2-11  
電話03-3812-4464  
振替00160-3-3812-4464  
アカツキID:003-3812-4464